

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想
 - 2-1：近代の知的状況における宗教思想
 - 2-2：批判哲学から批判的实在論へ
 - 2-3：シュライアマハーの宗教哲学
 - 1：シュライアマハーと宗教哲学の基本問題
 - 2：シュラエルマハーの言語論の射程 6/3
 - 2-4：ティリッヒの宗教哲学
 - 1：ティリッヒの象徴論 6/10
 - 2：ティリッヒの神話論——シェリング、カッシーラー 6/17
 - 2-5：波多野精一の宗教哲学
 - 1：波多野宗教哲学と实在論 6/24
 - 2：波多野宗教哲学の方法論、そして象徴論 7/1
 - 2-6：ヒックと批判的实在論 7/8
 - 2-7：言語から宗教的实在へ
 - 1：リクールと解釈学的プロセス 7/15
 - 2：イエスの譬えの読解プロセス 7/22
 - 2-8：言語論と宗教哲学 7/29
 - 2-9：次元論と宗教哲学 10/7

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

<前回>批判哲学から批判的实在論へ

(1) カントの批判哲学とその意義

1. 経験的实在論＝素朴实在論による近代科学の説明不可能性。
2. カント解釈の多様性あるいは幅
3. カントと形而上学

・カントによる伝統的な自然神学や形而上学への批判は、人間理性の能力を越えた事柄に対する間違った接近方法に向けられたものであって、ここに現代の形而上学批判の発端を見ることができる。しかし、カントに批判哲学は単なる形而上学批判にとどまらず、人間の自然的本性に属する運命的な問いにいかにかアプローチするのか——「将来建設されるべき形而上学」——を視野に入れた議論だったことを忘れてはならない。」（芦名定道「キリスト教思想と形而上学の問題」『基督教学研究』24、2004年、5頁）

4. カントと人間学的転回

- ・波多野精一「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）：波多野宗教哲学の原型・原構想
「カントにおいて、宗教哲学が批判主義の指示す新しい道を出発し、進行しておるのを見るのである」、「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なっており、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」（201）
- ・パネンベルク：Die Anthropologisierung der metaphysischen Funktionen Gottes in Kants

Kritik der reinen Vernunft

(2) カントから批判的实在論へ

4. 宗教哲学にとっての科学哲学と意義、類似性
5. ギルキー：批判的实在論

Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress, 1993.

7. 感覚主義的ドグマ

the two sensationalist dogmas that *only* through sense data is reality known and that science *alone*, therefore, gives indication of what is real (63)

8. 感覚主義のドグマを越えて
9. もっとも有力な反論（哲学的、別の科学哲学、新しい科学理解）→哲学的神学
科学的知の実証主義的見解は認識過程の特性と科学的知識自体についての誤解を示している。

10. 批判哲学

11. 心の構成的役割という議論の危険性

A view that rejects naive realism and stresses the constructive actuality of mind faces the dangers of relativism and skepticism. it seems to put itself in danger of ultimately granting no validity to scientific knowledge at all. (69)

实在はせいぜいのところ曖昧なものにとどまるか、悪くすると認識されない。

→ 相対主義、懐疑主義

科学的認識の妥当性の全否定は、現代文化の一員にとっては不可能。

ここで可能な問い：個別科学の与える描像・モデル・一般原理・定式は存在する。これらは、全体的で最終的な知識なのか。

12. 批判哲学の再定式化の試み、カント的二元論の再定式化

ホワイトヘッド、サンタヤナ、ティリッヒ

感覚的経験・科学について、カテゴリーは別のところより由来する。

この自覚によって知られる内的参与の要素がないところでは、いっさいの主観を削除した対象の排他的全体性、主観の側からの徹底した懐疑主義が帰結する。

(極端な実証主義と極端な観念論)

13. 修正された柔らかい批判哲学

(3) ロイ・バスカーの批判的实在論

14. 『科学と实在論 超越論的实在論と経験主義批判』法政大学出版局。

(Roy Bhaskar, *A Realist Theory of Science*, Leeds Books, 1975.)

・古典的経験論（素朴实在論）と超越論的観念論（批判哲学）に対する超越論的实在論（批判的实在論）

・経験主義（暗黙の存在論、原子論的事象／表象、閉じた系、人間中心主義）は、科学的発見と実験の意味を説明できない。個人的な感覚・経験の一般化によっては、科学は成立し得ない。

15. 「認識が対象に従うのか、それとも対象が認識に従うかの、二つに一つである。われわれの語り的事物の関数なのか、それとも事物がわれわれの語りの関数なのか、そのいず

S. Ashina

れかである。超越論的観念論はこのような言い回しを好んで使う。しかし、これはまやかしの二分法である。科学は一つの活動であり、思考を通じて展開される一個の自然史的過程である。つまり科学は、思考とは独立に存在する事物の本性或組成や作用様式を思考の内に表現せんとする営みなのである。」(325)

「事物はわれわれがそれをどう記述するかとはまったく無関係に存立・作用している。反面、われわれは特定の記述を通じてしか事物を認識することはできない。記述は人間の織りなす社会という世界に属しているのに対して、対象は自然という世界に帰属する。」(326)

↓

・「経験・感覚／事象／事物」の区別 → 事物＝非経験的・超事實的

cf. カントの「物自体」

・「科学が可能であるためには、その対象である世界はどのようなでなければならないか。」

(19)

自然法則は人間が存在しない世界でも作用し続ける。

↓

・ transitive (他動的) と intransitive (自動的)

科学は社会的活動であり (先行する知的活動という素材が前提となる)、知識はその産物である→哲学的社会学

知識社会学

科学は自然の実在的な構造やメカニズムといった人間存在とは独立して存在する事物と法則についての認識活動である。

I have shown the structured and intransitive character of the objects of scientific enquiry to be a condition of the intelligibility of experimental activity and the social nature of knowledge to be a condition of the intelligibility of scientific training. (247)

・自然と科学的認識における階層性・分化

経験主義は階層性を認めない、還元主義。

2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

2-3 : シュライアマハーの宗教哲学

1. シュライアマハーと宗教哲学の基本問題

(1) シュライアマハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)の特徴

①近代プロテスタント神学の父

啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合

同時に、近代解釈学の父、現代宗教学 (宗教現象学) の父

②啓蒙思想とロマン主義の総合

カント・フィヒテ→

ロマン主義運動→

体系構想 (神学-哲学)

ヘルンフト兄弟団

1796(29)

1810(42)

ハレ大学神学部 (宗教的懐疑)

ベルリン

ベルリン大学神学部

1787(19)

『宗教論』(Reden) 『モノローゲン』

③解釈学・弁証法・倫理学、体系家→信仰論 (『信仰論』(Glaubenslehre))

Dogmatik から Glaubenslehre へ

(2) 『宗教論』の信仰概念

1. 信仰・宗教の規定

意図：宗教の独自性－宗教学の基礎、宗教哲学
宗教多元性の問題（第五講）

2. 宗教と形而上学・倫理学との区別＝宗教の固有性・実在性

宗教の本質について（宗教本質論・第二講）→「直観・感情」（「本質－現象」の枠）

1) 直観：有機体的な統一的な宇宙、スピノザ的

無限と有限：表現、象徴

2) 感情「それは多様性と個性とを象徴にした無限で生きた自然という根本感情」「無限に向かう憧れ、無限に対する畏れの心」

「聖なるあこがれ」「内なる本性の呼び掛け」

3) 直観と感情

4) 形而上学と道德

3. ロマン主義

啓蒙的合理主義の克服

4. シュライアマハー宗教哲学の特徴

① 宗教・信仰の直接的場へ「感情」「直接意識」 → 宗教現象学へ

② 人間性における宗教 → 弁証神学、宗教の本質概念（本質論から現象論へ）

③ 「感情」から「認識」「行為」へ → 人間の存在構造における宗教性（哲学的人間学）これは、信仰を精神の諸機能の一つの特定機能としての知性、意志、感情のいづれかと同一視することの不十分さを意味する。むしろ、これらの諸機能を統合した人間精神（人間理性、人間存在＝実存、人間性）における本質的な可能性として宗教・キリスト教を理解すること、その上でその特殊な実現としてのキリスト教的信仰の意義を論じることが、要求される。

④ 実定性 → 個別的で歴史的な諸宗教（実定宗教）への定位 cf. 理神論・自然宗教

5. 共同体と信仰（第三講、第四講の意義）

・「基礎的段階をなす自然的時間とそれの上に建設される文化的時間との区別に、アウグスティヌスが思い到らなかったことは確かにこの説の欠陥である。……しかして文化的生が自然的生よりの解放の企画を意味することを思へば、上述の如き欠陥と関連して、彼の説いた「時」が単純孤立の状態にある主体の生き方を意味するに過ぎなかったことは、当然の事態といふべきであらう。」（波多野精一『時と永遠』293-294）

「かくしては持続としての時は文化的時間より将来を取除いたものに過ぎぬであらう。さてすべてこれらの事どもはいつこに源を有するのであらうか。いふまでもなく、主体が単独孤立の立場に置かれたことが一切の誤謬の原因である。」（同書、295）

↓

これは、波多野による、アウグスティヌスとベルグソンの時間論に対する批判である。つまり、孤立した個・主体（抽象的な人間存在＝閉鎖系。ロイ・バスカーの経験主義批

S. Ashina

判！）が、人間理解において有する決定的な限界である。

・「およそ実存論神学におけるひとつの問題点は、信仰的現存在の決断における脱自的超越がいかにして「共人性」（*Mitmenschlichkeit*）を自己化するか、という問題である」、「実存論神学における最大の弱点は教会論にある。」（森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社、1972年、506頁）

「「わたし」と「われわれ」は、それほど単純に同一視されたり、単純に相互転換されるとは、考えられない。」（同書、512頁）

・以上の点で、シュライアマハーの宗教論の第三講、第四講は、注目に値する。

（3）シュライアマハーと宗教哲学の基本問題

5. 宗教哲学とはいかなる学問か

- ・波多野：「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なって、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である。」
- ・批判的実在論：宗教も科学もそれがコミットする存在の実在性を前提にする。そして、宗教と科学という人間の活動は実在する。この実在する宗教と科学とが存立するための条件を解明することが、宗教哲学と科学哲学の課題となる。

「宗教が可能であるためには、その主体である人間はどのようなでなければならないか。」（←ロイ・バスカー「科学が可能であるためには、その対象である世界はどのようなでなければならないか。」）

6. 宗教哲学の基本問題（宗教研究基礎論、宗教研究の哲学）→具体的な多様な宗教研究

（芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年、13-18頁）

- (1) 宗教とは何か。（宗教の概念規定：哲学的人間学・現象学的類型論）
- (2) 宗教はいかなる積極的な存在意味を持つのか。（宗教批判の批判的検討）
- (3) なぜ、多様な宗教が存在するのか。（宗教的多元性）

↓

この基本問題との関わりで、シュライアマハー、波多野精一、ティリッヒ、ヒックを検討する。

<宗教論 (Reden)>

I. Rede: Apologie

第一講 弁明 宗教批判（への応答・意図）

II. Rede: Über das Wesen der Religion

第二講 宗教の本質について 宗教本質論：直観と感情

III. Rede: Über die Bildung der Religion

第三講 宗教の教育について 共同体論 1（個と共同体）

IV. Rede: Über das Gesellige in der Religion

第四講 宗教における集団について 共同体論 2（宗教の実定性）

V. Rede: Über die Religionen

第五講 諸宗教について 宗教的多元性（とキリスト教）

I. Rede: Apologie

- wo dieser heilige Instinkt verborgen liegt (10)
- in die innersten Tiefen möchte ich Euch geleiten, aus denen sie zuerst das Gemüt anspricht; (11)
- Nur Euch also kann ich zu mir rufen, die ihr fähig seid Euch über den gemeinen Standpunkt der Menschen zu erheben, die Ihr den beschwerlichen Weg in das Innere des menschlichen Wesens nicht scheuet, um den Grund seines Tuns und Denkens zu finden. (11)
- Wo sie ist und wirkt, muß sie sich so offenbaren, daß sie auf eine eigentümliche Art das Gemüt bewegt, alle Funktionen der menschliche Seele vermischt oder vielmehr entfernt, und alle Tätigkeit in ein staunendes Anschauen des Unendlichen auflöst. ... bei diesen Systemen der Theologie ... In allen diesen Systemen ... habt Ihr also die Religion nicht gefunden.. (14-15)
- es muß ganz für sich allein stehen(19)
- Daß sie aus dem Inneren jeder besseren Seele notwendig von selbst entspringt, daß ihr eine eigne Provinz im Gemüte angehört, in welcher sie unumschränkt herrscht, daß sie es würdig ist durch ihre innerste Kraft die Edelsten und Vortrefflichsten zu bewegen, und von ihnen ihrem innersten Wesen nach gekannt zu werden; das ist es was ich behaupte, (20-21)

II. Rede: Über das Wesen der Religion

- "was die Religion ist" (22)
 - vor jeder Verwechslung der Religion mit dem was ihr hier und da ähnlich sieht (23-24)
 - Stellet Euch auf den höchsten Standpunkt der Metaphysik und der Moral, so werdet Ihr finden, daß beide mit der Religion denselben Gegenstand haben, nämlich das Universum und das Verhältnis des Menschen zu ihm. (24)
 - Soll sie sich also unterscheiden,... (24)
 - Dieses Gemisch von Meinungen über das höchste Wesen oder die Welt, und von Geboten für ein menschliches Leben (oder gar für zwei) nennt Ihr Religion! (25)
 - Sie begehrt nicht das Universum seiner Natur nach zu bestimmen und zu erklären wie die Metaphysik, sie begehrt nicht aus Kraft der Freiheit und der göttlichen Willkür des Menschen es fortzubilden und fertig zu machen wie die Moral. Ihr Wesen ist weder Denken noch Handeln, sondern Anschauung und Gefühl. Anschauen will sie das Universum, in seinen eigenen Darstellungen und Handlungen will sie es andächtig belauschen, von seinen unmittelbaren Einflüssen will sie sich in kindlicher Passivität ergreifen und erfüllen lassen. (28-29)
 - Praxis ist Kunst, Spekulation ist Wissenschaft, Religion ist Sinn und Geschmack fürs Unendliche. Ohne diese, wie kann sich die erste über den gemeinen Kreis abenteuerlicher und hergebrachter Formen erheben? wie kann dies andere etwas besseres werden als ein steifes und mageres Skelett?
 - Grundgefühl der unendlichen und lebendigen Natur..., deren Symbol Mannigfaltigkeit und Individualität ist.
 - das Gefühl des Unendlichen / die Sehnsucht nach ihm, und die Ehrfurcht vor ihm (30)
 - dem Triumph der Spekulation, dem vollendeten und gerundeten Idealismus,

einen höheren Realismus ahnden läßt

Allegorie

Spinoza! ... voller Religion war Er und voll heiligen Geistes; (31)

- Anschauen des Universums,

Alles Anschauen gehet aus von einem Einfluß des Angeschaueten auf den Anschauenden, von einem ursprünglichen und unabhängigen Handeln des ersteren ... (31)

- das Universum ist in einer ununterbrochenen Tätigkeit und offenbart sich uns jeden Augenblick. und so alles Einzelne als einen Teil des Ganzen, alles Beschränkte als eine Darstellung des Unendlichen hinnehmen, das ist Religion. (32)

Alle Begebenheiten in der Welt als Handlungen eines Gottes vorstellen, das ist Religion, (32)

- Die Systemsucht stößt freilich das Fremde ab,... (36)

- Alles was ist, ist für sie notwendig, und alles was sein kann, ist ihr ein wahres unentbehrliches Bild des Unendlichen;

- jede Anschauung ihrer Natur nach mit einem Gefühl verbunden ist. (37)

III.Red: Über die Bildung der Religion

Nicht die Zweifler und Spötter , sondern die Verständigen und praktischen Menschen, diese sind in dem jetzigen Zustande der Welt das Gegengewicht gegen die Religion, (80)

auch unser Zeitalter der Religion nicht ungünstiger sei, als jedes andre. Gewiß, die Masse derselben in der Welt ist nicht verringert, aber zerstückelt und zu weit auseinander getrieben; (89)

IV.Red: Über das Gesellige in der Religion

- Ist die Religion einmal, so muß sie notwendig auch gesellig sein: es liegt in der Natur des Menschen nicht nur , sondern auch ganz vorzüglich in der ihrigen. Ihr müßt gestehen, daß es etwas höchst Widernatürliches ist, wenn der Mensch dasjenige, was er in sich erzeugt und ausgearbeitet hat, auch in sich verschließen will. In der beständigen, nicht nur praktischen, sondern auch intellectuellen Wechselwirkung, worin er mit den Übrigen seiner Gattung steht, soll er alles äußern und mitteilen, was in ihm ist, ... (98)

- was zu seinen Sinnen eingeht, was seine Gefühle aufregt, darüber will er Zeugen, daran will er Teilnehmer haben. (99)

V.Red: Über die Religionen

- Daß der Mensch in der Anschauung des Universums begriffen ein Gegenstand der Achtung und der Ehrfurcht für Euch Alle sein muß; (131)

erhabneren Gemeinschaft der Geister

- in den Religionen sollt Ihr die Religion entdecken, (132)

So habe ich die Mehrheit der Religionen vorausgesetzt, und ebenso finde ich sie im Wesen der Religion gegründet.

So viel sieht Jeder leicht, daß Niemand die Religion ganz haben kann; denn der Mensch ist endlich und die Religion ist unendlich; (133)

Positive Religionen nennt Ihr diese vorhandenen bestimmten religiösen Erscheinungen und sie sind unter diesem Namen schon lange das Objekt eines ganz vorzüglichen Hasses gewesen; (135)

<参考文献 1・日本語の研究文献を中心に>

1. シュライエルマッハー 『宗教論』岩波文庫、筑摩書房。
Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern (PhB 255).
On Religion. Speeches to its cultured despisers
(translated by Richard Crouter, Cambridge University Press, 1988).
Introduction. pp.1-73.
2. 大峰顕編『神と無』(『叢書ドイツ観念論との対話』[5]) ミネルヴァ書房。
3. プレーガー 『シュライアーマッハーの哲学』玉川大学出版部。
4. ジェームズ・デューク、フランシス・S・フィアレンツァ
『シュライエルマッハーの神学』ヨベル。
5. 武安 宥 『シュライエルマッハーの教育学研究』昭和堂。
6. 川島堅二 『F・シュライアーマッハーにおける弁証法的思想の形成』本の風景社。
7. ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』(ティリッヒ著作集・別巻3)白水社。
8. 波多野精一『宗教哲学』『宗教哲学序論』『時と永遠』岩波書店。
9. 武藤一雄『神学と宗教哲学との間』創文社。
10. 芦名定道「ティリッヒとシュライアーマッハー」、『ティリッヒ研究』(現代キリスト教思想研究会)第2号、2001年、pp.1-17。

< Web >

川島堅二氏のサイト：<http://homepage3.nifty.com/ex-cult110/schleiermacher/>

日本シュライアーマッハー協会：<http://www1.doshisha.ac.jp/~sgjapan/>